

優しい毒

高岡 啓次郎

真夜中のベッドランプが灯る中、深い井戸の底をのぞくような眼差しで妻の寝顔を見つめていた。そのとき寝室に鏡がなかったことを喜ぶべきだろう。もしそばに姿を映すものがあつたなら、山根慶介は自分の眼光と嫉妬に歪んだ顔に恐怖を抱いたにちがいない。

そんな夫の気持ちなど何も知らない妻は、さも気持ち良さそうな寝息をたて、行儀よくまっすぐな姿勢で細いあごを上にもかけている。四十のなかばを過ぎていくのが信じられないほど、あどけない表情は無垢といつてもいいくらいだ。

妻とふたつしか年齢が違わない慶介は思った。この女は、なぜにこうも若くいられるのだろう。自分はこんなにも髪が白み、かつて引き締まっていた顎や肩に見苦しく贅肉がついている。だが、この女の顔には皺ひとつない。こうして見ていると、大学卒業後に結婚してから長い年月が経っ

ているという実感がわいてこない。つややかで血色のいい肌、学生時代と変わらないほっそりとした首、誰かの口づけを待っているような開きかけた唇、ちよつと上を向いた形のいい小鼻――。

このとき気がついた。今日の俺は心の中で妻のことをいつものように霧子という名で呼んでいない。他人のように女と言っていた。手を伸ばせば届く距離にいる妻が果てしなく遠くにいるようだった。その唇から発する、すこし鼻にかかった甘えた声が内耳のさらに奥から呪わしげに聴こえてくる。

慶介は舌打ちした。だが昨日までいだいていた妻への情がなくなつたわけではない。それどころか、彼はたつたいま、この美しい女をかつてないほど愛しいと思っている。しかしそう思うと同時に、できうるならこの手で殺したい衝動にかられているのだった。

昨日出かけてきた海辺の町と、そこに暮らしていた友人に関する想念が慶介を眠れなくしていた。まだ二か月も過ぎていない友人の死は、闇に隠れていたものを明るみにさらすことになつたかもしれないのだ。理性的にならねばと思つた。サイドに置いておいたペットボトルの水を、排水口のような音をたてて飲みこんだ。上唇にはり付いていた舌がとけてくる。腹にしみこんでいく水が、まだ忘れようにも忘れられない最近の記憶の棚にながれていった。

優しい毒

小樽築港から程近いところにある桜町は日本海に面した美しい町である。海からの磯臭い風と、毛無山から吹きおろす冷たい気流が南北に伸びる細長い町を日替わりで吹きぬけていく。十年前からその町の高台に住んでいた羽田雄一郎が十一月六日に札幌のTホテルで急死を遂げたのは、かねてからの持病である心臓発作によるもので享年四十六歳の若さだった。

大学で経済を教えて十五年を過ぎていた彼が結婚当初から不整脈の治療を受けていたのは周りの誰もが知っていた。前日の夜、Tホテルでは自治体が主催する経済フォーラムが行われ、羽田は三十分の基調講演をしたあと聴衆参加による質疑応答でコメントーターとして出席していた。

集まりのあと、夜の九時からおもだつた参加者たちの打ち上げがホテル屋上ラウンジで開かれた。羽田を含め、地方からきた関係者たちはその夜、同じホテルに宿泊することになつてた。何人かの話によれば羽田は市長や助役をはじめ地元企業家からすすめられるままに、いつになく多量の酒を飲んでいったという。

その翌日、チェックアウトの時間が過ぎても羽田が現れないのでフロントが不審に思い、何度か部屋に電話を入れたが何の応答も得られなかった。総支配人の裁量で鍵を開けたとき羽田はベッドですでに息絶えていた。検死が行われたが、死因は持病の心臓発作であることが確認された。

死亡推定時刻は筋肉の硬直状態からして夜中の一時〜二時のあいだであろうと思われた。だが一つだけ、彼の死に不可解なことがあつた。

それは部屋の様子からして、明らかに女性とみられる誰かが側にいたらしいということだった。本人のものとは別に、口紅がついたワイングラスがベッドの傍らに置かれてあつたし、枕もとには柔らかな長い黒髪がシーツに絡みつき、仄かな香水の匂いが辺りに漂っていたというのだ。

ベッドの横に携帯用のアトマイザーが落ちていた。しかし発見されたときに謎の人物は立ち去つていた。果たしてその人物がいる間に発作が起きて死亡したものか、あるいは女が帰つたあとにそうなつたかを明らかにするすべはなかつた。

警察による形だけの調査がなされたが、検死の結果に何ら事件性は見られなかつたため女のことはあえて公にされなかつた。しかし故人を親しく知る人々は事情をうすうす知ることになつた。それは脚色した噂としていやがうえにも広がつたが、身近でそのことを知らないのは羽田の一人娘だけだつたかもしれない。

鑑識はアトマイザーに入っていた液体を調べたようだが、それは何ら危ない薬剤ではなく、クリスチャンデイオール製の香水であることがわかつた。そのことは、あえて外部に発表されなかつたはずだが嗅覚の優れた週刊誌の記者に

よって小さな記事になった。

三日後におこなわれた葬儀には親族の他に教授仲間や教え子たちは勿論のこと、地元の経済団体からも大勢が斎場を訪れた。北風の強い日で、枯葉が地吹雪のように宙を舞い、会場の周りには朽ちかけた葉溜まりが随所にできていた。

祭壇の上にかかげられた遺影には、数年前に撮られたと思われる故人が写っていた。そこには色白の額が伸びやかに広く、見るからに学者らしい秀麗な顔立ちの羽田雄一郎がいた。メガネの奥から少年のような純一ともいえる眼差しを見る者すべてに送っていて、薄い唇にかすかな微笑を浮かべていた。

季節はずつかり入れ替わり街中がクリスマススの買い物客でにぎわっていたころ四十九日の法要が小樽市の高台にある臨法寺でとり行われた。粉雪が降りしきるなか寺の本尊が置かれた肌寒い板の会場に故人の遺影と祭壇がおかれ、喪服を着た親族知人三十名ほどが集まった。

法要が終わり、列席者には別室で食事が供された。その部屋には大きな窓が南と西の面にあり、冬木立のむこうには小樽の町が一望できた。列席者たちは暗い講堂に長い時間いたせいで長テーブルに座った誰もが眩しうに目を細めていた。

だが、今日は参加してくれた一人一人に丁寧すぎると思えるほど饒舌に話をかえている。そのことが友人の慶介から見れば名の知れた学者の妻としての精一杯の虚勢の表れに思えてならなかった。

それとは対照的に終始おし黙った美樹という名の娘が高校の制服を着て母親のかたわらに隠れるように座っていた。誰もが気を使って一度は話しかけようとするのだが美樹は静かにうなずく以外に話そうとしなかった。時間が経つにつれて近づく者はいなくなり、どこかに向かって見るともない空虚な視線を送っている。そんな様子が気がかりで慶介はときおり声をかけたが、会話をかわすにはいたらなかった。

食事が終わったあと、壁に寄りかかりながら足を延ばしてタバコをのんでいた慶介のもとに雪子が近づいてきた。目の周りに疲労のあとが見られるものの、キリッとした東洋的な顔立ちには、これから女手ひとりで娘を育てていかねばならないという強い意志が感じられ、ある種の闘志を秘めているとさえ思わせる凛としたものがあつた。高い身長から見下ろすように静かに微笑してから膝を屈め、折り目正しく正座した。

「本日はお忙しいところ羽田のために来ていただきまして、まことに有難うございました」

丁寧なあいさつを述べたあと、いくぶん表情をやわらげ

朝から降り続いていた雪はずつかりやんでいた。新雪が午後の冬陽を受け、ときに目を開けていられないほどである。気をきかせた誰かがブラインドを半ばまで下ろすと、いつせいに窓際の者が見習って遮光のために動いた。

山根慶介はブラインドが半分下ろされた窓から外をながめていた。今日は町から色が消えているようだった。ふだんはけばけばしいデパートの看板もくすんで見える。

こうした日は、瞳の中の瞳孔が閉じられるせいで、建物も樹木も境内を歩く人物も、目に映る何もかもが白と黒の世界に見えるのだった。まだ四十代という故人の若すぎる死の悲しみとは裏腹に寺院をとりまく景色の何もかもが酷薄なまでに白く輝いていた。

夫の突然の死と、それにまつわる良からぬ噂によるショックで、しばらく引きこもっていた羽田雪子も表面上は少し落ち着きを取り戻しているように見えた。亡くなった羽田より五歳年下で、若いときS大学の事務職員をしていたことがある。

長身だった羽田に負けないほどの身長をもつ雪子は洋装の喪服がよく似合っていて、年配者が多かったその日は異彩を放つほどに目立っていた。切れ長の目と高い鼻梁に特徴づけられる面立ちには、いつときアルバイトでモデルをしていたこともあるという垢抜けた雰囲気も漂っていた。

十一月の葬儀のときは石のように沈黙していた雪子だっ

て、慶介さんは今からお忙しいのですかと言った。

何か相談事でもあるのだろうか。そう思った慶介は居住まいを正し、額に垂れさがった前髪を手の甲で払いよけながら、もう片方の手でタバコを灰皿においた。彼はいつものように友人人口調でこたえた。

「いや別に予定はないよ。今から家に帰るだけだから」

「そうですか。良かったら少しわたしの家に寄っていただけませんか？」

慶介は雪子の眼差しに意味ありげなものを読みとり若干のたじろぎを覚えた。

「ああいいけど。——何かあるの？」

このとき声を低めねばならないような気がしたが、雪子はいっこうに周りを気にするでもない。

「たいした用事ではないのですけれど、家にある蔵書のことなのです。できたら、あの人が残した本を少し貰ってくださらないかと思って」

そんなことだったのかと内心すこし落胆したが、思いを気取られないように再びタバコを手にして口にあてた。煙と同時に言葉がでる。

「いいのかなあ。彼の蔵書には貴重なものがたくさんあるのだろう？」

「仕事から経済関係の専門書が多いのよ。でもこのままだと、どうせどこかに寄付することになると思うの。あの人

が亡くなってしまつて、生徒さんが遊びに来ることも泊まりに来ることもないだろうし、もうあんな大きな家ははいらないのよ。落ち着いたら売りに出して小さなマンションにでも引越したいの」

「あれだけ大きな家だと雪かきだけでも大変だろうからね。実は僕らがマンションに入ったのもそのためなんだ」

「そうでしょうとも、だから行き場のない蔵書はできるだけ親しい友人に貰つてもらえたら一番いい気がするんですけど誰にも声をかけていないから、今のうちに好きな本をもつていつて下さいな」

「そうか、では少し寄らせてもらつて、遠慮なく何冊かいただこうかな」

「ぜひそうなさつてね。でも残念ながら慶介さんがお好きな映画に関する本や資料はほとんど大学の図書室に寄贈したからないですよ」

「ほう、あれは大学に？　すごい量だったものね。どうせ僕のマンションは狭いから置く場所がないのだよ」

雪子は首を自分の肩にのせるようにうなづいて、もういちど微笑してから親族のもとに戻つていった。

亡くなった羽田雄一郎と山根慶介は小樽S大学の経済学部で同期だったが、共に映画が好きで、学内の有志たちが集まる鑑賞会に入つてから親しくなつた。何事も研究に余

念がない羽田は非常に熱心な部員になつたが慶介はどちらかといえば情性で参加しているような部分があつた。もともと体を鍛えることのほうにもつぱらの関心があつたから、他の友人に誘われるままに登山部の集まりにもときどき顔を出して休みごとに近場の山に登つたりしていた。

ところが、二年後に霧子が鑑賞会に入つてきてからは事情が変わつた。小柄だが入学して間もないころからミスS大と陰でささやかれたほどの美貌で、慶介は霧子が部員になると同時に鑑賞会の非常に熱心な参加者になつた。

三人はどこか波長があつて何かと意気投合した。部活が終わつてもそのまま喫茶店に直行し議論に花が咲く。しかし慶介は時間がたつにつれて二人の会話に気おくれするようになった。詩や絵画の話を楽しげにかわし、マラルメやヴァレリーがどうしたの、画家のワイエスには酔わせられたという話を聞いても話についていくだけの知識がなく、きつかけをつかむことも諦めて口を開けて見ていることがあつた。

そんな慶介を霧子はあからさまではないが、どこかさげすむような視線を送ることがあつた。慶介は二人の話題についていけるよう関心がない本を何冊も読んだ。明らかに霧子は知的な羽田にひかれていたようだった。卒業が近づいたころに打ち明けられたことがあつた。自分は羽田が好きだがあつさりふられてしまつたと。大学院に行つて学

者の道を選ぼうとしていた羽田は恋愛にうつつをぬかししている暇がなかつたのかもしれない。

その機会に乗じて猛アタックをかけた。それは卒業後も続き、とうとう慶介は霧子を自分にひきつけることに成功し、数年後には結婚にゴールインしていた。学校を出たあとは証券会社に入って比較的順調な出世を上げていたし、羽田は学者としての道を目標どおりに歩み、大学院をへて母校の講師になつた。

そこで羽田が助教授になつたころ大学で事務職員をしていたのが雪子だった。教授の後押しもあつて二人は交際を始め、やがて愛し合うようになった。周りに祝福されてキヤンパス結婚式が執り行われたのは慶介と霧子が結婚した三年後だった。家族ぐるみにつきあいがしばらく続いた。しかしいつしかお互いの生活に押し寄せるさまざまな雑事のせいとか、ひところのような行き来はうすれ、話題にのぼることも少なくなつていった。

四十歳から母校の教授にむかえられていた羽田は同僚のあいだでガリバーというあだ名で呼ばれるほど知識において群を抜いていた。それを裏打ちするように無類の読書家として知られており大変な量の蔵書家でもあつた。彼の住む家は、地元では『桜町文庫』と呼ばれるほどで六つの部屋のうち三部屋の壁が床から天井高くまで隙間なく本で埋め尽くされているのだった。

四十九日の法要が終わつたあと、慶介は自分の車で羽田の親族が乗つた二台の車とともに桜町の家へむかつた。国道から右折して徐々に高度が増すにつれ、バックミラーには切りとつた絵のような景色が広がる。登りつめた高台からは朝里の海が冬には珍しいほど青く澄みわたっている。はるか遠くの増毛連山が雪をのせた白い稜線で縁だられ、驚くほど近づいて見えた。

羽田の家は小学校のグラウンドを見下ろす位置に造成された欧州風の建物の群の一つだった。美しいパイン材がふんだんに使用され、海側に突き出たウッドデッキが辺りの景色を独り占めしている感があつた。親族に続いて最後に玄関に入ると、雪子がスリッパを差し出しながら言った。

「慶介さん。二階にお上がりになって好きな本を選んでくださいね。開いているダンボールがたくさんあるから、持てるだけ貰つて下さると助かります。本を詰め終わつたら下でお茶でも飲んでゆっくりなさつてね」

「ありがとうございます。遠慮なく何冊か選ばせてもらいます。でもお茶のほうは遠慮しとこうかな。親族みずいらずのほうが良いとおもうよ」

慶介がそう言うとき雪子はかすかに残念そうな表情をした。二階の書齋へ上がつていくと部屋の隅に娘の美樹がいた。今しがた皆と一緒に臨法寺から帰ってきたばかりなのだが

着替えもせずに畳の上で膝を抱えて座っていた。そこには親族との交わりを避け、ひとりになりたがっている雰囲気があった。慶介はつとめて屈託のない笑顔を浮かべ、さりげなく話しかけた。

「美樹ちゃん、今日は疲れただろう」

「うん、少しだけ」

「おじさん、パパが残した本を少し貰ってもいいかな？」

「はい、どうぞ……」

白い歯を見せて答えた美樹は無理に微笑しているように見えた。

「それにしても本の量が半端じゃないね」

前に何度も見たことはあるが、あらためて向き合うと、ちよつとしたコミニュティセンターの図書館に匹敵するようになっている。一つの本棚だけが空になっているところをみると、そこには映画に関する資料があったのだろう。

書棚から本を手に取りながら慶介は美樹に軽い冗談を投げかけた。最近では塞ぎこんでばかりいて学校を休みがちだと聞いている。それは無理もないことだろうが、何とか元気づけたいと思っただけだ。学生時代のたわいもない失敗談や、秀才の羽田に比べて自分がどれほど遊び歩いて差をつけられたか、そんな気楽な話をしていこうと美樹はいくぶん明るい表情を見せるようになってきた。

書棚から二十冊ほどを選び出したが、ダンボールにはそ

の中から十冊ほどを入れて、あとは書棚に戻した。選んだのは自分が好きな歴史ものが多かったが、書棚の隅のほうにひっそりと眠るように置かれていた世界の映像史を見つけたときは懐かしさがこみあげた。隅に置いてあったので大学への寄贈リストからもれたのだろう。

慶介はその本が高価なことを知っていたので貰うことを躊躇して元に戻した。とりだした本を何冊も書棚に戻してダンボールにフタをするのを見ていた美樹が遠慮がちな慶介に言った。

「おじ様、もつとたくさんお持ちになったらいかがですか？ 父も喜ぶと思いますから」

学者の娘として厳しく躰けられたらしく、少し大人びた丁寧な言葉づかいだった。

「そうかい？ ではお言葉に甘えて女房の好きそうなものを貰っていいのかな」

「どうぞ、おばさまはパパの後輩だったのでしょう？」

「そうだよ。うちのやつが二級下だったんだ。三人は同じサークルだったから何かと仲良くしていたんだよ」

美樹は静かにうなずき、そのころは自分も書棚の中から本を引っ張り出してページをめくったりした。慶介は妻のために花の画集と香りに関する何冊かの本を見つけ、「これも貰おうかな」と言っただけで美樹の同意を得るように話しかけてダンボールに詰めた。

帰りがけに慶介は少しあらたまった表情で美樹を見つめた。お父さんがこんなことになって大変だろうけれども頑張りなさいという言葉が喉もとまで出たが、そのせりふをのみこんで別の言いかたをした。

「美樹ちゃん、落ち着いたらお母さんと遊びにいらっしやい。一緒に美味しいものでも食べようよ」

それに対して美樹は無言でうなずいた。そのとき水気のない柔らかい髪が美樹のふくらんだ頬をおおった。それを細い指でかきわけながら笑顔をつくる仕草がどこか痛々しかった。まだ誰かと遊んだり美食を楽しんだりする気にならないことは分かっていたが、閉塞された少女の心理に、何か逃げ道を提供したいという思いはあった。

階段をおりると、美樹が居間で親せきの相手をしていた母親に慶介の帰りを知らせにいった。普段着に着替えていた雪子が花柄のエプロン姿で玄関に出てきた。先ほどまでの喪服を着ていた人物とは別の女性に見えた。慶介はダンボールを小脇に抱えながら本の礼を言った。

「お言葉に甘えて好きな本を貰いましたよ」

「どうぞどうぞ」

雪子はエプロンで濡れた手をぬぐいながら、
「もつとたくさん持っていけばいいのに。遠慮する仲じゃないでしょう」

雪子の話し方は普段の親しげな言い方になっていた。

「いや、これで十分だよ」

そう言ったあとダンボールのフタを半分開けながら、「ついでに女房の好きそうなものを何冊か貰ったので」とつけたとき、慶介はかすかな恐怖に似た感覚をおぼえた。

雪子の切れ長な瞳が、ほんの一瞬だが上空に何か得体の知れないものが通り過ぎたみたいに鋭く光ったからだ。

だが、すぐにいつもの顔になり、

「どうぞ、ご遠慮なくお持ちになって下さい」

低い声で笑顔もなく雪子は言った。親しげな話し方は影をひそめ、再び他人行儀な言い方に戻っていた。

玄関を出て車に乗り込むあいだも雪子はなぜか押し黙ったままだった。美樹がどこか不安げな面持ちでふたりを均等に見ていた。慶介は母親に手をふって雪の坂を下った。

最上町のマンションに通じる坂道に着いたのは夕方近かった。早くも太陽は天狗山の後方に沈みつつあった。道路には日中に融けた雪がシャーベット状態で残っており、少し凍りかけた道はタイヤを滑らせハンドルが左右にとられた。彼は対向車に気を付けながら泳ぐように車を動かし、急こう配の坂を上がっていった。

緋色のタイルを貼った八階建てのマンションは沈みかけた西日を受けて建物の最上階だけがスポットライトを浴びたように赤く、それより下は泥を塗ったように暗褐色だっ

た。慶介は駐車場に車を入れ、足もとに注意を払いながら本が入ったダンボールをかかえてエレベーターに乗りこんだ。

一日中留守にしていた六階の部屋は氷の蔵のように冷え切っていた。荷物を下ろしてすぐに暖房と湯沸かし器のスイッチを入れる。霧子はまだ帰宅していなかった。今日は朝から札幌に出かけているはずだ。ブナの木を張りあわせてテーブルにはメモが置かれてある。自分が留守のあいだ夫が夕食に困らないようにという配慮であり、結婚当初から彼女が出かけるときの恒例だった。

メモの指示どおりに冷蔵庫を開けると、そこには鍋に入ったビーフシチューがあり、刻んですぐに食べられるサラダがラッピングされて置いてあった。台所のシンクの横には電気ポットがあり、木彫りの盆の上にソーサーとカップが置かれ、すぐに飲めるようにコーヒーと紅茶のパックが二つずつきれいに並んでいた。

慶介はときどき思うことがある。いつも、どんなに忙しくて家事をきちっとこなす霧子は自分にはもつたない女だと。体調のすぐれない期間が数年続いたことがあったが、そんなときでさえ自分の勤めを抜かりなく果たそうとする性格は昔から変わらなかった。

霧子が心を病むようになったのは五年ほど前からだった。そのころ相次いで両親を亡くしたことがおもな理由と考え

られたが、本当のところは不明のままだ。霧子は自らの内面をさらそうとしなかった。しかし慶介には、もしかしたらと思いついた理由があった。そのころ羽田の妻である雪子と妙な関係になったことがあったのだ。それは今にして思えば一時的な熱病におかされたといふ言いがない。

あれは羽田が仙台の大学に助教として単身赴任していたときだった。雪子に寂しさが昂じていたに違いない。町で偶然に出逢ったとき車で自宅までお供つてあげた。そのとき家には娘の美樹はいなかった。雪子は妙に打ち沈んでいた。お茶を飲んで帰ろうとしたとき、雪子は目に涙を浮かべ、くずおれるように慶介に身をまかせてきた。

突然おちいった二人の関係は長くは続かなかった。羽田が母校に戻るようになったからだ。それはおそらく夕立のような出来事だったろう。自然に二人はプライベートで会わなくなり今にいたっている。互いの気まづさも相まってか、家族単位で会うのも一年に一度か二度がせいぜいだった。

霧子がたえず寒さ込むようになった時期はそれと時を同じくしている。それは偶然かもしれない。たまたま重なっているだけであり、精神を患ったのは両親を亡くしたせいだと慶介は考えることにした。だがときどきふと思うことがある。妻はすべてを知っていたのではないかと。

幸いにも霧子のうつ状態は三年ほどで去っていったように思われる。彼女は数年前からアロマセラピーに深い関心を持った。それは自分がうつ病を患ったとき、それによって癒されたからでもあった。

もともと香りに敏感だった霧子にとって、アロマは人間を幸福にする優れた手段であるという確信をもったようだ。熱心に学んでその種の資格をたくさんとった。今日も札幌で婦人サークルの講師を頼まれていたので羽田の四十九日の法要には来られなかった。

長いあいだ家に閉じこもっていた霧子が外に出るようになって再び見違えるようにきれいになったのは慶介にとつて嬉しいことだった。四十四歳という年齢から十を引いても誰も疑わないほど霧子は若々しかった。ときには夫ながらどきりとするほど妖艶に見えることがある。痩せぎすだった体にはほどよく肉が付き、成熟しきった匂い立つような女の色気が滲み出ている。

湯沸かし器の余熱が終わったことを知らせるアラームが鳴った。浴室の給湯蛇口をひねり、黒服からラフなジャージに着替え終えたころは外が暗くなりかけており、外気が急速に冷え込んできているのがベランダの水柱の色でわかった。垂れていた雫が止まり、透明だった氷の表面が白く固まっている。赤みをおびていた空はどんよりとした暗い鈍色に変わり、粉雪がベランダの茶色いタイルを白く変え

はじめていた。

雪は時間とともにますます激しくなった。しかし風がないために雪片は真っ直ぐに線をひくように規則正しく落ちてくる。それは粉糠雪よりもはるかに量が多く、マンションの六階から見ると小樽灣がモザイクのかかった映像のように霞んでいた。

コーヒーを飲みながら仕事の整理を始めた。駅前のK証券で部長をしている慶介には休日でもさえ多くの仕事があった。あと一年ほど真面目に勤めれば支店長になる見込みがあると半年前に重役にほめかされていた。

ところが、最近顧客離れが加速している。アメリカのサブプライム問題に端を発した金融不安のため、株価は暴落につぐ暴落で、投資家たちは誰もが瀕死の状況におちいっている。顧客からの苦情や相談がひっきりなしに携帯に入るの、そんなときにも電話を持ち歩かねばならない。今日は親友の法要が行われた日でもあるのでマナーモードにしてカバンに入れておいた。

そのことに気づいたとき、しまったと思った。取り出してみると思ったとおり着信記録には三度にわたって同じ人物の名があった。それは十年ほど彼が担当している会社役員だったが、最近の下げ相場で信用取引の担保率が急速に悪化している人物だった。こんな休みの日に何だろう、もしかしたらあの事か……。

そう思っただけで連絡をとったが留守電になっていた。月曜日に入金してもらわねばならない追加保証金のことかもしれないという不安が頭をよぎった。資金の準備に何か問題でも生じたのだろうか。バブル崩壊のとき大口顧客に逃げられた苦い記憶がよみがえった。何度か時間を変えて連絡したがやはり先方は留守だった。

もし追加保証金が入れられなければ強制的に顧客の持ち株を処分しなければならぬ。そうすることは多くの場合いちじるしく気分を害し、取引をやめてしまうケースが多い。苦勞してつかんだ顧客を失うことは営業マンにも会社にも大きな損失だ。自分を落ち着かせるためタバコをとりだして火をつけ、大きな煙を窓にむかっけてはいた。

「俺はなんと運が悪いのだろう。せつかく支店長になれる寸前だというのにこんな経済状況になってしまふとは」

メリルリンチが破綻したように、今ほどの証券会社も自社の経営状態が危ないのだ。こうなれば望んでいる昇進はおろかりストラの対象にもなりかねない。

体がふるえクシャミがたて続けた。パネルが示す室温は十八度を超えているのに床や家具はまだまだに冷え冷えしていた。満杯になった浴室に入り、冷たい体を熱いバスタブにつけた。硬くなった筋肉がほぐれていく。冷凍肉がとけるように自分の身体がとけてしまふように感じる。仕事のこと今さら思い悩んでも始まらない。出世は望め

最近人気ランキングの下位にあるという。もともと香りの強い香水だが、微量を用いるなら仄かな甘い香りは魅惑的だ。

この香水がもつとも自分に適していると霧子は思っているようだった。特に最近売られているプロズンはひとりの強い香りをおさえた上品でさりげないものに変わりつつあるという。

霧子が、そもそもプロズンを愛用するようになったきっかけを与えたのは羽田だった。そのころ独身だった羽田はなんどか慶介と霧子がいる新居に遊びにきた。話が映画のことと及んだとき羽田は言った。

「あの映画に出ていたヒロインは実に艶めいていた。彼女がつけていた香水がそのあと一時的にブームになったというよ」

「どんな香水なの？」と霧子は訊いた。

「タンドール・プロズンというのだよ。その日本語が面白い。優しい毒という意味がある」

「まあ素敵じゃないの。私も使ってみたいな」

霧子はいたずらっぽさの中にも、どこか妖艶な眼差しで慶介と羽田を均等に見た。

それからまもなく霧子はそれを愛用するようになった。体調をくずしていた期間をのぞけば常にその香水を愛用していたといつていい。適度に用いるとその香りはやわらか

ないかもしれないが、こうして生きて生活していけるだけ幸せなのだと自分に言いきかせた。若すぎる友人の死は、想いの中に書かれていた未来への野心を実現する設計図を消し去ってしまった、やりきれない空しさだけが心を覆っていた。

霧子が用意しておいた夕食を終えたあと、昼間に羽田の家から貰ってきた本をダンボールから出した。書棚に暫らく読めそうもない本を入れ、枕もとに何冊かを並べた。そのうちの一冊を手にとって開いたとき、ひらりと一枚の紙切れが床に落ちた。それは故人が本に挟んでいた何かに違いなかった。

拾い上げてみると病院の領収書だった。羽田が心臓の持病で小樽病院にかかっていたのは知っていた。もはや必要もないものだろう。捨てようとしてゴミ箱に手を伸ばしたとき何の気なしに領収書の裏を見た。そのとき戦慄が走った。その小さな紙面にはこう書かれていた。

――Tホテル 十一月五日夜 プロズン

十一月五日の夜といえど羽田が最後に泊まった日ではないか。羽田はそれから数時間後に亡くなっている。しかし慶介がさらに驚いたのは別にあつた。プロズンという言葉に身が縮む思いをしたのだった。それは妻の霧子が長年にわたって愛用していた香水の名前だった。

バブル時代に毒という銘々で一世を風靡したこの香水も

く上品だった。慶介もそれは嫌いでなく、妻そのものの芳香にさえ感じられるのだった。

初めのころ霧子は余程のイベントでなければつけていくことはなかった。だがどういうわけだろう。その香水をつけたときにかぎって媚を売るようにして慶介に甘えてくるのだった。ときには寝室にある三面鏡の前でキヤミソールを着た姿でわざと見えるようにふりかける。鏡に映った瞳は熱をおびた光を飛ばしてくる。

それは霧子が女であることを表現する最も端的な香りとなった。優しい毒をスプレーした妻が娼婦のような装いで現われるとき、若い健康な男である慶介はなんど溺れたか分からない。それは嬉しくもあつたが、人が変わったように蠱惑的になるのを見てみると、快感のなかにもどこか空恐ろしさをおぼえたこともあつた。

それも今は遠い過去のことと思える。最近の霧子はプロズンを昔のように愛用しているが、それは、家だというよりは外出するときに必ず用いる習慣になっているようだった。その香水を使っている人は果たしてどのくらいいるのだろうか。慶介はもういちど本から落ちた紙きれを見た。

――Tホテル 十一月五日夜 プロズン

胸騒ぎを止められなかった。すぐにクローゼットが置かれてある部屋に行った。そこにはもうひとつの化粧台がおかれ、壁にはカレンダーがか

かっている。霧子はいつでも暦に予定を書き込む習慣がある。すでに裏返しにされていた先月の暦を見た。そこには友人との約束や講習会の日付、アロマを注文した記録があったが、なぜか十一月五日の部分には赤ペンで印がついていて何の書き込みもなかった。自分の中から血が抜けていくように感じられた。

古い暦をかたっぱしに調べた。すると月に二度ほど赤い印があり、やはり何の予定も記されていない。おもに平日の午後が多かった。それはどれも慶介が仕事に出ている時間に当たっていた。

九月の暦には二日続けて印があった。それは慶介が東京に会議で出かけていた期間に他ならなかった。慶介はある想念に悩まされた。

もしかしたら霧子は自分と雪子との過去のあやまちを何もかも知っていたのかもしれない。羽田が死んだ夜、そばにいた女が霧子だとしたら、倍返しの恐ろしい復讐を長い期間にわたって実行してきたことになる。その日の夜、慶介はまんじりもしないで妻を待っていた。

霧子は十二時過ぎに酒を飲んで帰ってきた。よくぞ家までたどりついたと思うほどに泥酔している。疑惑を問いただそうと身構えていた慶介はとりつく島もなくただ立ちつくしていた。

拭い去れない嫉妬が彼をとらえて離さなかった。霧子は意識がとんだまま無防備に服を脱ぎ散らかし、胸もあらわにベッドに身を投げだした。

この愛しい女を引き裂いてしまいたいという衝動が突き上げてくる。慶介は、にわかにはわきおこった殺意を胸に押し隠して霧子の美麗な顔から目をそむけた。

彼が天井を見たそのとき、今日の午後、桜町の家から帰ろうとしたときに羽田雪子が見せた一瞬の鋭い視線があらわれた。何かを通り過ぎたような一瞬の眼ざし――。雪子もすべてを知っていたというのか。

雪子のうしろに、優しい毒を吹きつけて意味ありげに微笑している霧子が立った。二人の女は無表情な仮面をかぶった能舞台の役者のように、有無を言わさぬ冷然とした表情で彼に迫ってきた。